栄泉寺

曹洞宗の禅寺である栄泉寺は、大森町の通りの西に位置する丘の中腹から大森町の中心部を見下ろしています。栄泉寺は 1596 年に建立され、1732 年に石見銀山を災害から救ったという地元で有名な伝説が残っています。その年、害虫が西日本各地の農作物を荒廃させ、大飢饉を引き起こしました。銀鉱山で徳川幕府（中央政府）を代表していた代官の井戸平左衛門（1672–1733）は、上官の許可を待たずに、手元に使える備蓄米を使って民衆を救うことにしました。彼はまた、米で納めることになっていた地元の村からの税金の支払いを免除しました。しかし、彼の最大の功績は代替作物を導入したことでした。旅の僧侶が井戸にサツマイモを紹介したところ、代官はサツマイモを自分の管理下の土地全体に植えました。伝説では、井戸の施策で石見銀山では餓死者を一人も出さずにすみ、彼のリーダーシップは広く賞賛されたといわれています。

僧侶が井戸にサツマイモの話しを伝えたとされる栄泉寺は、1800 年に大森の大部分を焼失した火事で全焼しました。
本堂は 7 年後に再建され、1853 年には壮大な山門が建立されました。この山門の構造が、日光の将軍徳川家光（1604–1651）の霊廟の門に似ているとの意見があり、代官所で論争を引き起こしました。栄泉寺は門を解体するよう命じられましたが、当時住職が不在であったためすぐには執行できませんでした。そうこうする内に、1867 年に徳川幕府が倒れ、現在も山門は寺院の入り口に立っています。